

何かに生き甲斐を持つという考え方が間違っている

仕事の生き甲斐とやり甲斐

仕事を生き甲斐にし、また生き甲斐にしなければならぬと思ひ込んでいる人がいる。

こんな貧しい発想はない。もっと深刻なのは、仕事を生き甲斐にしていることに誇りを持っていると得意になっている人々である。

なぜ深刻かというと、もしその仕事がなくなってしまえば、その人の人生は終わりなのかということである。みじめなのかということである。

サラリーマンには定年がある。定年退職したら人生は終わりなのか。もし交通事故にあつて職を失うような事態になったら、その人物は生き甲斐を失うのか。

まだ定年ではない、現に交通事故にもあわないうで元気に働いているとはいっても、それはたまたま偶然にしかすぎない。それは交通事故にあつると同じくらい、偶然性の産物なのである。

しかし定年は、老いは、確実にやってくる。死と同じように。

そもそも××に生き甲斐を持つ

という考え方が間違っているのである。

いや生きている限り生き甲斐がなくっちゃと思うかもしれない。その生き甲斐は全部幻想にしかすぎない。あなたは明日病に倒れて、その生き甲斐と思ひ込んでいるものを手離さなければならぬかもしれない。

この世のこと一切について、何かに賭けて生き甲斐を持たねばならないというのはまやかしなのである。

同じように命を賭けて××をやるといふのも、一時の興奮でいつているのだから、何ともやりきれない。たかが仕事なのである。たかがビジネスなのである。

人間にとって生命は、ただそれだけで、ただそのままでも条件をつけずに尊いのである。社会的な地位や財産の有無、健康のいかにかわららず皆同じ尊さなのである。

仕事を生き甲斐にしなければならぬとか、生き甲斐のある仕事

をもたなければならぬというの
は、自らの生命の尊厳を勝手に狭
くし、いやしめることになる。

それを貧しい心という。もっと
重大な問題は、彼らのいう生き甲
斐のある仕事につけない人々を、
軽蔑したりいじめたりすることに
ある。

正義感や使命を振りかざして人
を殺すのも、同じような考え方の
延長線上にある。生命や人間の尊
厳にとつて、使命とは、たかが使
命なのである。生命と引き換えて
いい使命なんかひとつもない。

ここで誤解されるのを回避する
ためにひと言つけ加えておこう。
仕事を生き甲斐にしないからと
いつて、仕事をいい加減にする
というのではない。仕事を
能力の最善をつくして取り組むの
である。

できないからといって自殺をし
たり、ノイローゼになることはな
い。最善をつくしていればそれで
足りる。成果が上げられなくて報
酬が少なくなったり、得られなかつ
たりするかもしれない。

それでもいい。厳然と生きてい
るからである。人間の生きる本当
の価値は、生そのものにある。ビ

ジネス上の評価は、経済価値評価
である。人の生くるはパンのみに
あらず、である。

それでは家庭や家族に生き甲斐
を求めるのかというと、そうでは
ない。この世のこと一切に生き甲
斐を求めないのである。つまりこ
の世に生き甲斐があるなんて、幻
想にすぎないと考えるのである。

そのような生き方を生産的な生
き方という。

さて、仕事のやり甲斐は持った
ほうがいい。楽しく、好きで、自
分自身を十分に表現できるような
仕事への取り組みは望ましく、喜
びに満ちたものになる。それは病
気をしたり、退職したりしても、
よい思い出こそなれ、決して人を
絶望に追いやるものではない。